

かわら版

NPO市民フォーラムの
「市民プレス」私家版

「朝日屋原薬局」

百二十五年を経て、営業に励む



初代「原林吉」は現朝霞市浜崎の出身、「池田」の姓は、後に養子縁組により「原」となった。明治二十年ころ、商業の盛んだった現在の志木市本町に移って事業を始め、その基盤をつくって、現在地に店舗を新築した。現在の店構えは明治四十五年に完工した。



の三代を振り返って

創業以来、新しい化学製品を取扱い、絵具染料が主力で、その他の化成品のほか、ビール、ガラス、大谷石など、雑貨を手広く販売した。「林吉」は、仕入れのため、志木から土手治いに南下、徒歩で東京に向い、主に日本橋で取引した。

夜歩き始めて、着くのは早朝で、昇る朝日の光景が印象的だったことが「朝日屋」の屋号になったようだ。注文した物品は、浅草「花川戸」から、新河岸川の舟運によって運搬され、志木河岸で荷受けしたのち、所沢、飯能、石神井方面などに販売された。また店頭で小売りもした。

二代「原林三」は、これに加え、薬剤師の資格を得て、家庭薬の製造、医師向け医薬品の販売も行なった。処方調剤のほか、症状に応じて調剤することも、当時は許されていた。戦時下には医薬品の供給は配給制度となったが、朝日屋原薬局は、和光市、朝霞市、新座市、志木市、富士見市などの医師向け、小売り薬局、薬店への医薬品配給の元売りとして営業した。

因みに、「原昭二、温代」の長男「原俊太郎」は、東京大学薬学部を卒業したのち、研究生活をつづけ、現在は昭和大学薬学部准教授として勤務している。またその妻「原智子」は東京大学薬学部を卒業、現在は長女の子育てと家事に当たっている。

三代「原昭二」は、薬学を学び、薬剤師となって家業を継いだ。向学心を断ち難く、東京大学薬学部在籍して薬化学の研究に励み、さらに東京薬科大学に移ってからは、薬化学の教育と研究に従事し、その成果は、国内外の学界で発表された。

三代にわたり、当主の妻たちの内助の功は大きなものがあり、特に二代目を支えた「原こう」は、戦時中と戦後の混乱する経済のもとで営業に励み、また三代目を支えた「原温代」は薬剤師として店頭に立ち、志木駅前開設した支店の営業や、駐車場の経営にも当って、多忙を極めた。



1991年の国際会議ISCD（ローマ大学に於て）に招待されて講演する三代当主、原昭二教授



営業中の店頭 看板は櫨、絵具、染料の文字



NHKの取材を受ける店頭



建築したのは、宮大工宗岡の小日向さん（遺影）



紅梅・白梅、物置と離れ



離れの玄関と紅葉



数寄屋造りの離れの二階の座敷



建物を修理中のベテラン秋元さん



百年の赤松



洋間の屋根に足場を掛け



夕陽に映える

初代の「原林吉」が創建した主屋、土蔵と、二代目「原林三」が増築した洋間、離れは、国登録有形文化財として、このたび全国規模で開催される、「近代化遺産公開」の行事として、志木市教育委員会ほかの主催で、一般公開されることになった。

店舗は大通りに面しており、市条例に従い樹木を整備して、景観を保つ努力もなされていて、庭木の手入れと家屋の修理は続けられている。特に、百年以上を経た赤松は戦時中も欠かさず手入れされたので、建築物と調和して景観を保っている。

新しい年は、松の緑、紅白梅、枝垂れ桃が花をつけ、離れの竹林では筍がでて、食用にもなる。櫺が芽吹き、庭一面は新緑に包まれる。

牡丹、躑躅、椿なども花開き、秋になると、柿、栗、柚が実り、木屋が香り、紅葉が庭を赤く染める。

武蔵野台地の

果つるところ・・・



明治二十年代

台地の東端、かつての「引又宿」

東武東上線の「志木駅」東口を降り、歩いて約15分、本町一、二丁目の大通りは、江戸時代から新河岸川の舟運によつて賑わっていた。明治初年まで、甲州街道と日光街道とを結ぶバイパスだった「奥州道」の宿場で、「引又宿」と呼ばれていた。

江戸時代、寛永のころ、埼玉県西部の中心都市「川越」は、江戸城北方の重要な防衛拠点だった。江戸と深い関係をもつた多くの史蹟が残る川越は、いまも「小江戸」といわれているが、寛永十五年（1638）、大火に襲われ、市内の重要な建物だった東照宮、喜多院などが焼失した。当時の東照宮は三大東照宮の一つに数えられていた。徳川幕府はその再建のため、江戸城にあった紅葉山御殿を分解し、用材を川越に移築することにしたが、その運搬には新河岸川による水路が使われた。このとき始まった舟運によって、川越からは農産物が江戸に送られ、その後舟運は整備され、川越と江戸との物資交流の大動脈となった。

江戸と川越との物資輸送のため中継点が必要になり、現在の志木市の、柳

瀬川と新河岸川が合流する地点に船着場が設けられた。当時この辺りは引又といわれ、その河岸（引又河岸）に、川越藩主の命令によつて、「井下田回漕店」が開業した。井下田家に残された資料によると、荷主の分布は、新座、清瀬、所沢、小平、国分寺、武蔵村山、立川を越え、秋川、青梅、八王子にまで達していた。

船着場で荷揚げされた荷物を運搬する人々は、ただら坂を上つてゆき、河岸場から運ばれた荷物を、この通りで取引した。そのため市場通りは商いで繁盛した。

もう一つ、引又宿には欠かせないものがあつた。それはこの大通りの中央を流れる「伊豆殿堀」（野火止用水）だ。承応四年（1655）、川越城主松平伊豆守信綱が、自領であつた「野火止」の原野を開拓するため、灌漑用水として掘削したものであつた。この堀は、現在の志木市の本町通りを貫通し、新河岸川に流れ込んでいたが、寛文二年（1662）、引又の対岸、宗岡地域の地頭岡部左兵衛は、新河岸川を越えて

送水し、灌漑用水に利用しようと考えた。そのため家臣の白井武左衛門に命じて巨大な架け樋を造らせた。この架け樋は四十八個の木の樋をつないで造られていたことに因んで「いろは樋」と名付けられ、長さは260メートルにも及んだ。しかも舟の通行を妨げぬよう川面から4〜5メートルも高いところに架けられた。



「江戸名所図会」に描かれた引又河岸
国立公文書館内閣文庫所蔵の原画を修飾
(手前は架橋、その上が「いろは樋」)



引又宿古絵図

また引又宿は、宿場として、人馬継ぎ立て業務をも行なっていた。江戸時代の紀行文にも、軒を連ねた商家、定期的に開かれた市の有様が生き生きと描かれている。市場通りには、穀物商などの商家、大店が並び、両側に柿と梨を植えた用水が通りの中央を流れていた。裕福な商人の社交の場所であつた酒樓や旅籠の賑わいも伝わってくる。

大正三年、東武鉄道東上線が開通し、舟運に取って代わるまで、この繁栄は昭和の時代、戦前まで続いた。

新河岸川に沿って開けた「引又宿」(いまの志木市本町通り)について書かれた二つの紀行文を読んでみよう。

『遊歴雑記』 釈 敬順(注1) 文化年間

新座郡引又宿

・・・・(前略)・・・されば引又の宿ハ、南北の町長さ三町余、新宿、本宿、中宿、坂下町と次第して町幅広く穀間屋あり、酒樓、食店、商家、旅籠屋両側に軒をつらね、片鄙には都会の土地にして、例月三、八の日市のたつ事となん、又又当処新宿の入口より、町の真中に大樋を掘埋め、幅三尺余、深き四五尺、新宿の方は高く、坂下の方ハ次第に低ければ、清流送り来り実にいさぎよし、此大樋の側にいたりて、市中の男女よろづのものをあらひすぎ飲水とす、元来此土地高みなれば水に乏しき場処なるに、斯潤沢に清流に富事ハ、全く伊豆守三代目松平信綱が高智のいたす処にして、万宝の最上といふべし、此埋樋の両側に、柿と梨との二樹を植る事凡長さ貳町、頃は九月九日なれば梨柿ともに見事に熟し、重たげに樹たハミ、枝垂て、人の手のおの届くといへども、児童だに狼籍せざるハ一品にして、土地に沢山なる故ならんかし。・・・(後略)・・・

『一日二日の旅』 東京の近郊 田山花袋(注2)

大正九年六月十五日

・・・・(前略)・・・野火止の街道の右側では、例の溝渠に添つて、農婦が頻りに物を洗つてゐるのを私達は見た。やがて少し行つたところから、四角を右に折れて、私達は志木の停車場のある方へ行つた。停車場近くに来た時には、もう灯が明るく夕暮の空気の中に見えてゐた。路の傍には、綺麗な水の一杯に満ちたその溝渠が流れてゐて、ある処では盛に水車が動いていたりした。そして、その溝渠と一緒に、私達はさびしい、しかし静かな昔の引又の里へと入つて行つた。

てゐたのが、今は、町の外れで大きな鉄管になって、川の底を越えて、向ふに行つてゐるのを私は見た。

(注1)

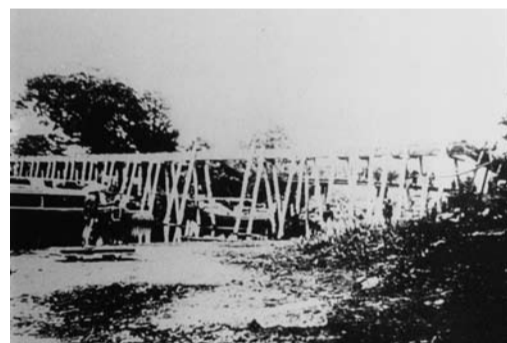
釈 敬順・・・江戸を中心として各地の名所旧跡を踏査し、全五巻の『遊歴雑記』を完成させた。この著作は近世紀行文中の白眉とされる。

(注2)

田山花袋・・・明治・大正時代の自然主義派の作家。「蒲団」や「田舎教師」などの作品がある。國木田獨歩と親交があり、獨歩は「余の親友なり。而して最も力となる人なり。渠と余とは全く性格を異にし、作品の傾向を異にする。而して尚ほ十年遂に親交を断たざるは何ぞや。他なし、互いに他を尊重すればなり」と述べている。

(注3)

内川・・・後の「新河岸川」。荒川の内側を流れるところから、名付けられたという。その後江戸との舟運のため、川越に河岸場がつくられ、新規の河岸から流れてくる川という名称(新河岸川)が、もとの「内川」に取って代わつた。



明治三十年頃の「いろは樋」



東京都青梅市から、狭山丘陵を越え、扇形に広がった武蔵野台地は、落差約百メートル、緩やかに下りつつ低地に移る。約五、六千年前、大きな海進（縄文海進）が関東平野一帯に及び、川越付近まで海が入り込んだ。埼玉県南を流れる柳瀬川、黒目川などの谷は入江となり、内湾に住むカキなどの貝を食用とした縄文時代前期の人々の暮らしは、彼等が遺した貝塚や縦穴住居の発見から裏付けられている。

現在志木市本町に所在する「朝日屋原薬局」の敷地の裏手は新河岸川に近く、「縄文海進」のころは、浅瀬の海に面していたようだ。

明治十年（1877）、エンドワード・モースが発見した「大森貝塚」から北に向い、新河岸川に沿って北上、「かき」の調理場、丸木舟が発見された上中里付近を経て、和光、朝霞、志木市から、富士見市の国史跡、「水子貝塚」、川越市仙波に至る武蔵野台地の縁辺には、いくつもの貝塚が散在していることから裏付けられる。

その間に位置する、JR京浜線の上野、日暮里辺りは崖線に沿っており、上野公園、谷中の墓地が所在する本郷台地の崖は、かつて湧水の溢れ出る武蔵野台地の縁辺だった。

武蔵野台地、今の地形

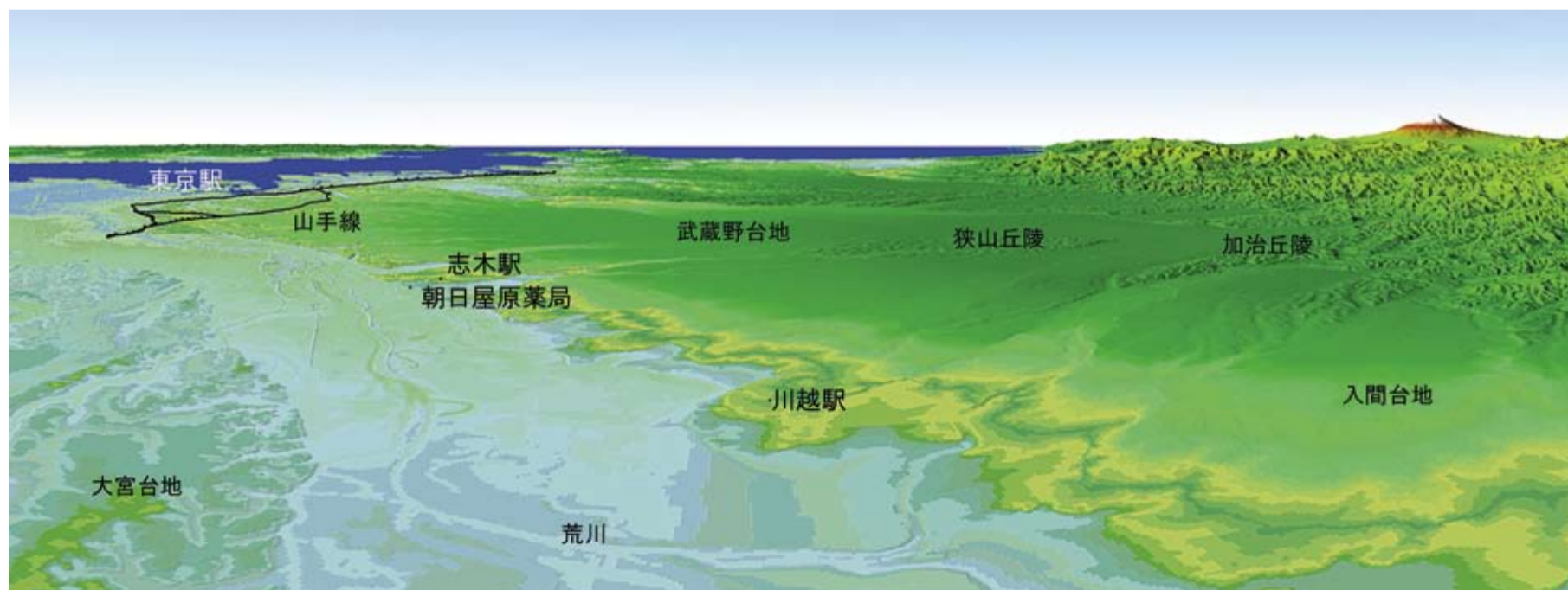


縄文海進のころ



空撮（志木市役所付近） 新河岸川と柳瀬川の合流地点

武蔵野台地の志木を見る Bird's Eye



国登録有形文化財となった「朝日屋原薬局」



市場通りにお店を構えて百年余りの「朝日屋原薬局」
上は大正期、下の写真は昭和初期。



が建築した洋館と「離れ」である。

平成15年3月20日の文化審議会は、志木市本町通りに面した「朝日屋原薬局」の建物を、有形文化財として指定するよう文部科学大臣に答申した。官報に告示され、7月20日登録証が交付された。

登録されたのは、主屋、離れ、物置、洋館などの七件。主屋などの主要な部分は、明治45年に建築された。道路から奥深く、縦長の敷地に並ぶ建物群は、「明治から昭和初期の老舗薬局の店構えと建物構成がよく残されている」と認定された。

「主屋」は瓦屋根の切り妻で、店舗の看板と大黒柱に樺材が使われた外は、もっぱら黒松が使われており、「建築するにあたって飯能の山をつ丸ごと買った」と伝えられている。

商家としての機能を優先した質実な作りが特徴。仏壇さえもが大工さんの手作りで、普段は目立たぬようになっている。家屋の内装に豪華さは見られない。土蔵、物置は主屋と同時に建築されたが、物置数棟はすでに取り壊され、当時の姿を残しているのは、土蔵と物置一棟のみである。また「屋敷神」として祀られた不動尊もこのころの造営。以上は私の祖父「原林吉」が建設したものである。

そのほか登録された建物は、私の父「林三

昭和の初期、交際していた方々を応接するため、洋館二棟が建築され、また地域の有力者を接待するため、「二階建ての「離れ」が建築された。緋鯉を放した池に面している「離れ」は眺めが良く、専ら宴会に使われた。今は無いが、離れの前には弓道場が設けられ、弓を引いて汗を流したあと、隣地に所在していた酒造「清久屋」から取り寄せた樽酒を汲んだ。芸者を招いて鼓を打ち、三味線を奏し、近くの「伊勢周」の洋食を味わうといった豪華なコースであった。私が小学校にもつゆく弁当には、しばしば、宴会で残ったハンバーグとポークソテーが使われた。

私はこの家に生まれ育ったが、十九才になったとき、父が世を去った。旧制の高校の入学試験が終わった、まさにその日であった。祖父、父が営業していた戦前には、雑貨、薬品を幅広く取り扱い、新河岸川の舟運を使つて商品を仕入れ、これを配送し、販売することが主たる業務であった。医家向けのほか、工場への化学薬品の納入、店頭では薬の小売り、調剤、家庭薬の製造、販売などの営業が、日々積み重ねられて家は維持されてきた。住み込みで働いていたのは、番頭を頭に常時七人前後で、家族を含めると十数人にのぼり、大きな竈で煮炊きされた。ただし竈はいまは無い。

ただし竈はいまは無い。

祖父は、仕入れのために夜中に家を出て、新河岸川の堤防を下り、東京を目指して歩いたという。太陽の昇る光景に感銘して「朝日屋」の屋号を定めたといえられている。輸入されたばかりの染料を仕入れ、アセチレン灯の「カーバイト」、酸、アルカリなどの工業薬品を扱い、当時はアメリカから輸入された板ガラスをも販売した。因みにいま「朝日屋原薬局」の店頭で使われているガラス戸には、大正時代にはじめて輸入された板ガラスが嵌め込まれている。舗装される前には砂利道であったのに、一枚も破損することなく今日まで使われてきたことは、長年住んできた私にとって信じられない事実で、奇跡的と思われて仕方がない。先祖からのメッセージかな？。当時は官で製造した恵比寿ビールの元売りをしていたが、その通帳を見ると、通常の取引額は数千円（いまは二千万円相当）になっていた、スケールの大きさに驚く。

私の生家「朝日屋原薬局」が今日在るのは、祖母、母の裏方の力が少なくないように思われる。特に私の母親の営業に対する意地はただものではなかった。休業の日は全く無かつたと云つてよい。戦中、戦後は人手も皆無となつて、一人で店頭で販売し、お店を休



大正期の絵葉書「志木町市中其の一」



野火止用水が暗渠になる前の市場通り
(戦後間もなく撮影：新井康一)

んだのは、近親の冠婚葬祭の時だけだった。急ぎの仕入のため、日本橋本町の間屋に向くのは私と姉と弟の仕事だった。母親はどこにも外出する余裕が無く、私は小学校、旧制度の中学、高等学校を経て、大学に入学したが、入学式にも、卒業式にも、父母が付き添って参列したことはなかった。店頭の販売を休むことはしなかつたのである。

「朝日屋原薬局」は、江戸時代から人々が往来した「志木街道」に面しており、この道路は、かつて、甲州街道と日光街道のバイパスの役目をもち、「奥州道」と呼ばれていた。しかし新河岸川の舟運の終結とともに、過去の商いの栄光は失われ、景観も変わった。我が家の前を流れていた「野火止用水」は消え、自動車の通行は激しさを増した。かつての大手の建物はつぎつぎと建て替えられた。周囲の家並みが変わつてゆくのに、わが家だけは遅れを取り、一軒だけ古い薬屋としてぼつんと取り残されてしまった。

歴史の街並みが消えてゆくとき、昔の面影を保つてきた薬局の姿をのちに残したい、私の文化財登録への想いをここに記させて戴いた。 原 昭一 記す

NPO市民フォーラムが編集する
CREATIVE BOOK
第8号「首都圏人」



暮らしを楽しみ 知的なヒントを与える 「首都圏人」は 1号から8号の刊行を以つて 第1期を完結します。

一般書店・楽天ブックス・amazonで
第8号近刊 予約受付中

この人 長井長義 日本の薬学の創始者
文学に親しむ 國木田獨歩の「武蔵野」
特集 JR山手線の地誌
Bird's Eye 空撮 変貌する都市の景観
JR新宿駅付近 赤坂御用地・迎賓館 JR池袋付近
JR田端駅付近 JR西日暮里駅付近 JR王子駅付近
JR赤羽駅付近

季刊 B5版 100ページ(カラー50ページ)定価630円(税込価格)

発行：(株) ヒューマン・クリエイティブ
〒113-0033 文京区本郷 5-9-5 TEL(03)3813-7937
FAX (048)476-9111 http://shutoken.camelianet.com/
発売：ブックキング
〒101-0062 千代田区神田駿河台 2-8 TEL(03)3233-5336 (代表)

第1号 [ISBN4-8354-7204-7]
第2号 [ISBN4-8354-7205-5]
第3号 [ISBN4-8354-7213-6]
第4号 [ISBN4-8354-7214-4]
第5号 [ISBN4-8354-7217-9]
第6号 [ISBN978-4-8354-7227-0]
第7号 [ISBN978-4-8354-7228-7]

特定非営利活動法人
NPO市民フォーラム

この法人は地域住民と行政に対して取材活動を行い、報道によって市民の公共参加を推進し、地域内のメディア事業を行つて、市民のコミュニケーションを向上させることを目的としています。

地域情報紙「市民プレス」はNPO市民フォーラムが編集・発行し、無料で配付します。

※ ※ ※

◇ 読者の「オピニオン」(意見/考え)を募集します。

TEL 090(3)04(8)5502

編集部 原宛にどうぞ